コロナの隙をついて調査旅行

榎本　渉

この四月、鹿児島へ四日間、久しぶりの調査旅行に行ってきた。新型コロナウイルスの流行から二年、東京への日帰り調査はともかく、数日にわたる遠出の機会はなかなか得られなかった。感染状況もそろそろ落ち着いたかと思って計画を入れても、行く頃になると緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の実施にぶつかり、中止を余儀なくされてきた。この鹿児島調査も、実に三度目の計画でようやく実現したものである。

今回は誰にも連絡せずに、一人で予定を立ち上げた。いつ感染が拡大するか分からない中で、行けると判断した時点で急ぎ動いたのである。鉄道のない地域のバス停の位置を確認し、一日数本のバス路線を利用した行程を検討するのは、パズルを解くような作業だったし、レンタサイクル利用予定の日に大雨の予報が出たことを受けて急遽日程を組み換えるなど、なかなか面倒は多かった。だが久々に調査に行けそうな気配の中で、私にはそれすらも楽しい作業であった。今回は研究の記録と言うよりは個人的な旅の備忘録として、見てきたものや体験してきたことの一部を摘記しておきたい。

今回の巡見地の内、現南さつま市の金峰町・加世田・坊津町については、大学院生時代の二〇〇一年に訪問したことがある。再訪の理由として、一つは注目すべき考古学上の発見が相次ぎ、それを踏まえた博物館の新設・刷新があったこと、一つはこの地域に散在する石造物が

対外交流を伝えるものとして評価されるようになったことがある。今回の調査は、こうした研究状況の変化を受けて、二〇年前には分かっていなかったことや見過ごしていたことを再確認しに行く旅だった。

二〇〇五年に設立された歴史交流館金峰は、今回の目的地の一つだった。平安後期〜鎌倉時代の宋・元代中国との貿易は、主に福岡県の博多津を窓口として行なわれたが、一九九〇年代に入り、薩摩半島の先端部（万之瀬川下流域の持躰松遺跡など）や奄美群島（奄美大島の倉木崎海底遺跡や喜界島の城久遺跡など）で、当該期の宋代の陶磁器片が数百〜数千点規模で出土する遺跡が次々と発見された。[1] 歴史交流館金峰は、万之瀬川下流域に位置する金峰町の発掘成果を踏まえ、外との交流を前面に押し出した博物館である。平安・鎌倉期の展示品では、やはり豊富な宋代の中国製陶磁器に目を引かれるが、国産品においても、徳之島のカムイヤキ、長崎県西彼杵半島の滑石製品、熊本県の樺番丈窯系の甕、畿内製の瓦器碗、愛知県常滑産の

薩摩半島南端部地図

陶器など、特定の地域で製作されたものや遠隔地の製品が目立つ。これらの遺物を踏まえてどのような流通路が想定できるか。たとえば宋から南九州まで直行する中国商船があったのか、一度博多に運ばれたものが沿岸航路を伝って運搬されたのか。研究者の間でもまだ共通の理解には至っていないが、当該期の日本列島の貿易構造を考える上で重要な問題である。

今回の調査の目的には、中世の中国系石造物の確認もあった。今年度、大谷大学の鈴木寿志氏とともに、文化地質学に関する共同研究会「日本文化の地質学的特質」を開催することになったため、それに先立って鹿児島の石造物を見て回っておきたかったこともある。調査対象の中心は薩摩塔である。これは九州の一部地域にのみ伝わる異形の石塔で、近年の研究によって、ほとんどが南宋・元代、一三～一四世紀の中国で作られたことが明らかになった。多くは赤味を帯びた特徴的な石材で作られており、中国浙江省の寧波で産する紫灰色凝灰岩の一種である梅園石と考えられている。[2] 寧波（当時は慶元）は日本向けの貿易港でもあり、薩摩塔は寧波から貿易船で運ばれた舶載品ということになる。半世紀前には旧薩摩国内のものしか知られていなかったため、薩摩塔と称するが、現在は鹿児島県域の旧大隅国内の他、福岡・佐賀・長崎県域でも多くの作例が報告されている。また薩摩塔の分布地域では、宋風獅子など他の中国系石造物も確認されている。その中には以前から知られていたものもあるが、舶載品という視点から注目されるようになったのは今世紀に入ってからである。

今回は諸般の事情で実見のかなわなかった石造物もあるが、多くは現地で確認することができた。博物館に移されているものもあり、たとえば南九州市のミュージアム知覧には、川辺町宝光院跡旧在の薩摩塔が常設展示されている。このたびこれを見るために同館を訪れたところ、川辺町の鎌倉期の文化財を展示する特別展「鎌倉頃の十三件」（タイトルは今年の大河ドラ

川辺町水元神社の薩摩塔（著者撮影）

マ「鎌倉殿の十三人」のパロディ）が開催されており、幸運にも普段非公開の宋風獅子の破片（薩摩塔のある川辺町の水元神社で近年発見された）も展示されていた。鹿児島の中国系石造物の多くは万之瀬川流域に分布しており、薩摩塔・宋風獅子が伝わる川辺町も万之瀬川の中流域に属する。川辺町では領主河辺氏の居館跡やその近くの馬場田遺跡からも一三～一四世紀を中心とする国内外の陶磁器が多く出土しており、その一部も展示されていた。これらは万之瀬川を通じて運ばれてきたに違いない。

かつて鹿児島の対外貿易港としては、坊津が第一に想定されてきたが、近年では、一四世紀頃までは万之瀬川流域が薩摩の主要な貿易拠点もしくは流通拠点だったと考えられている。だが坊津にも薩摩塔が一基伝来しており、一四世紀以前の坊津の対外交流の物証である可能性がある。これは坊津歴史資料センター輝津館に常設されており、他の薩摩塔と同様に赤い石材で作られていることも確認できた。実はこの塔は、以前訪問した時にも展示されていたらしい

（当時輝津館は坊津町歴史民俗資料館と言った）。だがその頃の私はこれを中国と関わる文化財と意識していなかったためか、見た記憶がない。文献も遺物も関心が向けられて初めて「資料」となること、関心の広狭が「資料」の多少に直結することを痛感させられた。

以上は博物館訪問の話だが、寺院・居館跡や遺跡の場所に赴いて、古地図や地形図を見ながら立地条件を確認することも、大きな意味がある。たとえば金峰町の南の加世田には、唐仁原（唐人原とも）・唐仁塚（都人塚とも）・当房（唐房とも）など中国との関連を思わせる地名が多い。これを宋人の居留に由来する地名と考える説もある。[3] 土地の記憶を考える時に、現地に立って周囲の旧道・古寺社との位置関係や遺跡との距離感を体感することは、必ずしも「成果」に直結はしなくとも、研究に深みを与えてくれるものである。

踏査に当たっては一応スケジュールを立てて行動したが、なかなか予定通りにならないのが旅の常であり、また醍醐味でもある。一例として、金峰町で観音寺跡の周辺の山道を踏査した時のことを書こう。観音寺は平安末期から室町期に金峰町域（当時は阿多郡）を支配した阿多氏・鮫島氏・二階堂氏が保護した寺院である。寺跡の周りには山道がめぐらされているが、その中に唐船塚という、いかにもいわくありげな字名を持つ場所がある。何もないとは思いながら散策してみたところ、偶然草刈りをしていた一人の老人に出会った。こんなところを一人で歩くよそ者の中年男性に、老人は大変驚いたようだが、私の目的を話すと安心して、このあたりの地理や昔の話などを聞かせてくれた（唐船塚の情報は得られなかったが）。話好きな方で、一つのことを聞き出すまでの長時間別の話を聞いたりもしたが、万之瀬川流域から海を経て野間岳まで見渡せる場所まで連れて行ってくださったのは大変ありがたかった。きっとこの寺の保護者だった中世阿多郡の領主は、寺僧を通じて万之瀬川への船の出入りを知ることができた

のだろう。結局観音寺跡での滞在は予定より一時間も長くなり、乗るつもりのバスも逃してタクシーを利用することになったが、思えば見知らぬ土地で見知らぬ人とコミュニケーションを取ることなど、何年ぶりのことか。この出会いにタクシー代三千円は高くない。

坊津町では港を歩いている時、何を探しているのかと、一人の親切そうな老人から声をかけていただいた。私が探していたのは港の墓地である。そこに福井県の日引石（ひびきいし）製の石塔があるとの情報を得ていた。日引石製の石造物は中世の日本海交通の要地に点在し、中世海運の広がりを伝える物証だが、坊津町はその南端に当たる。お目当ての地図は二次元の地図ではさほど遠くないように見えたが、老人に聞くと、切り立った崖の上にあることが判明。三次元にすると相当の時間がかかりそうである。この日はすでに移動や他所の調査で時間を取られていたため、楽しみにしていた港での昼食を抜いても時間はほとんど残されておらず、崖の上の墓地は諦めざるを得なかった。だがさらに悔しいことに、この老人は他にも色々な見どころを知っているらしい。聞けば港で民宿を経営しているとのこと。その民宿は当初私が宿泊しようとして連絡したが断られたところであった（コロナ対策のため二室で満室とされた）。これは是非また再訪して話を聞かねばなるまい。後ろ髪を引かれつつ、私は港を後にした。

こういう現地調査を気軽にできる日々も、そろそろ戻ってくるのだろうか。

（国際日本文化研究センター准教授）

1　『古代文化』五五―二・三号の特集「一一～一五世紀における南九州の歴史的展開」（二〇〇三年）、『貿易陶磁研究』四〇号の特集「南九州から奄美諸島の貿易陶磁」（二〇二〇年）など。

2　桃崎祐輔・山内亮平・阿部悠理「九州発見中国製石塔の基礎的研究」（『福岡大学考古資料集成』

四、二〇一一年）、井形進『薩摩塔の時空』（花乱社選書、二〇一二年）、橋口亘「薩摩南部の中世考古資料をめぐる諸問題」（『鹿児島考古』四四、二〇一四年）、井形進編『九州に偏在する中国系彫刻についての基礎的研究』（科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書、二〇一八年）、大木公彦・高津孝「浙江石材と日本中世」（市村高男編『中世石造物の成立と展開』高志書院、二〇二〇年）。

3　柳原敏昭『中世日本の周縁と東アジア』（吉川弘文館、二〇一一年）。